
セーラー服

浅葉りな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セーラー服

【Nコード】

N3555C

【作者名】

浅葉りな

【あらすじ】

——セーラー服を着てるからって、女子高生とは限らないのよ？
援助交際と、売春の境目になるのが、セーラー服なんだろう。

「ねえ、もし、あたしが女子高生じゃないっていったらどうする？」
あたしが首を傾げると、おじさんはくわえていたポテトをぽろりと落とした。そうして、おどおどあたりを見まわしながら、身体を小さく縮こまらせる。

新宿のマックで、他人のこと気にしてる人なんていないのに。なんだかおかしくって、あたしは笑った。

きつとこの人だって、会社ではそれなりに偉かったりとかしちゃうって、もし偉くなかったとしても後輩のひとりやふたりはいて。貧相でくたびれた感じだけど、ムリに胸張っていばりちらしちゃったりしてるんだろぅな。

「そんなわけないじゃないか。だってキミ、セーラー服着てるし……」

「コスプレだもん」

おじさんは目を白黒させて、Lサイズのコーラを飲み干す。

「あたし、もう二十歳なの」

「な、はたっ……」

驚きで声も出ない、というやつらしい。それがおかしくて、あたしはまた笑った。

まあ、驚くのも無理ないかな、とは思う。

だってあつちは、女子高生に声をかけたつもりだったんだろぅし、三万でどうって言われてあたしはいよいよって言ったんだし。

これで中身が女子高生じゃないなんて、きつと、誰も思わない。

「ごめんね。騙しちゃって」

「いや、かまわないよ」

鞆から取り出したハンカチで顔中をくまなく拭いながら、おじさんは笑う。さすがに、女子高生じゃないならいりません、なんて言えないんだろぅなと思うと、ちょっとだけ申しわけなかった。

「お詫びに、このあとホテルまでつきあってあげる。追加料金とかナシで。だから話聞いてくれる？」

おじさんはしばらく視線をさまよわせたあと、かすかに、うなずく。

「昨日、彼氏と別れたの」

言いながら、爽健美茶でくちびるを湿らせた。なんだか、やけにカサカサ乾く気がする。制服を当たり前のように毎日着ていた頃には、そんなことなかったのに。

「高校の頃からつきあってただけだし、多分、あたしが同い年の女の子じゃなかったら、あいつ、あたしを好きになったりしなかったんだろうな、って思ったら、冷めちゃった」

「え？　どういうことかな？」

笑わないで、おじさんは身を乗り出してくる。あたしはなんとなく、ホッとした。

「つまりね、あたしが男だったりとか、すごく年上だったりとかしたら、つきあってなかったんだな、ってこと」

おじさんは低くうなって、腕を組む。首を傾げても、べたべたした整髪料でかためてある髪の毛は落ちかかってこなかった。

「なんとなく……わからないでもないような気はするけど、それとこれと一体どういうかわりがあるのか、皆目、見当もつかないな」
「女の子には価値はないけど、女子高生には価値があるでしょう？」

あたしが訊ねると、おじさんはうなずく。

普通の女の子だったら多分誰も買わないけど、女子高生だったら、おじさんたちは買うのだ。

顔が可愛いとかそういうのじゃなくって……ブランドものが、どんなに趣味が悪くたって、似合わなくたってもてはやされるのと同じに、女子高生っていうだけで、商品価値が出てくる。

「でも、女子高生の価値って、つまり、セーラー服を着た若い女の子ってところにあるんじゃないかと思うの」

「だから、セーラー服？」

「そうよ。少しの価値もないなんて、寂しすぎるじゃない」

言って、あたしは立ち上がった。

「そういう……ものかな？」

「そうよ。だって、おじさん、あたしが女子高生じゃないって知ってた啦——もしも、あたしがこの制服を着てなかったら、あたしのこと、買ってくれた？」

「……どうだろう。でも」

おじさんはためらうように言葉を切った。そして、しばらくしてから続けた。

「それ以外にも、価値ってあるんじゃないのかな……？」

「……じゃ、そろそろ行こ。終電までに帰りたいの」

あたしは、おじさんの言葉を聞かなかったことにした。

そんな言葉は、なんの救いにもならないんだもの。

伸ばしたあたしの手を、おじさんが握る。

おじさんの手は、少し干からびかけた、筋ばった手だった。

——あたしはいつまで、セーラー服を着ていられるだろう。

ふとそんなことが浮かんた。

あたしは身を震わせて、なにこともなかったかのように、それを隠して微笑んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3555c/>

セーラー服

2010年10月15日07時54分発行